

NJ 素流協 News

平成24年12月31日 第96号

平成24年12月31日発行・発行所 ノースジャパン素材流通協同組合 〒020-0024 盛岡市菜園1丁目3-6 (農林会館9階)
 TEL 019(652)7227 / FAX 019(654)8533 / <http://www.soryukyo.or.jp/index.html>

第3回 国産材利用拡大 推進会議を開催

今年度の第3回国産材利用拡大推進会議が、12月19日、盛岡市の農林会館会議室において開催された。開会に当たってNJ素流協下山理事長は次のように挨拶した。



「昨今、木質バイオマス活用に関心が高まり、特に木質バイオマス発電所の構想が全国的に多数開

かれる。未利用材を活用するには、素材生産のあり方・仕組みを大きく変えざるを得ないだろうし、国産材でも作業仕組みや販売方法に変更が必要になる。しかし前向きに見れば、大変良いことで、我々としてはこれらの動向をよく見ながら、森林・林業の変化に対応していかねばならない。」

主な報告・協議事項は次の通り。
 一、原木等の需給動向について
 ア、素流協の出荷実績と見通し

11月までの合板用素材出荷量累計は約9万5千 m^3 で、樹種別の割合はスギ30%、カラマツ54%、アカマツ16%である。月別の出荷量は別図の通り。今後も同水準で推移する見込みである。集成材用のスギはもう少し出荷できる状況ながら、9月の規格等条件の変更以降伸び悩んでいる。工場側と協議を重ね、出荷量を伸ばせるよう努めていく。全体の出荷量累計は13万3千 m^3 である。

国有林システム販売は、石巻・宮古向け総計5200 m^3 の協定を

結んでおり、それぞれ約9割、6割の契約が終了している。組合員からの出荷量を見ながら、安定供給上の不足分を補う形で出荷を行っている。最近径級14〜16センチの細かい材が桤の40%を超え、工場と契約価格の折合がつかない問題が起きている。規格に関する要望が生産現場へ届くよう望む。

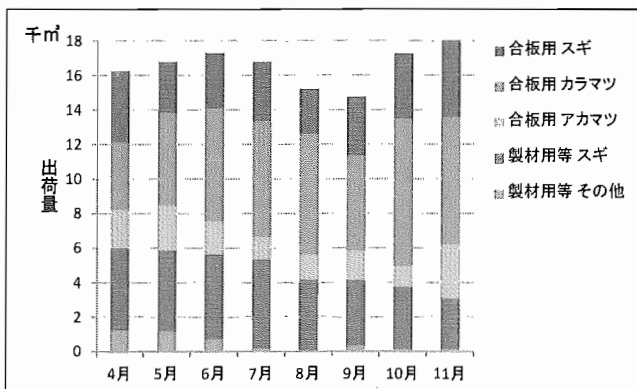


図 平成24年度NJ素流協出荷量の推移

イ、合板工場等の需要動向

【ホクヨープライウッド(株)】

9月まで納入が伸び悩んでいたが、現在は良くなっている。ただ

在庫が一月分を切っており、冬場の不安材料ではある。システム販売材の品質に関しては、14、16センチが使えないわけではないが、工程上手間暇がかかっている。安定供給の面から解決を望む。

【セイホク櫨】

復興需要ということで東北地域材を使用した製品の販売を行っており、青森・岩手・宮城に関しては合板、LVLとも引き合いがある。〇〇県産ということではなく、〇〇市町村産などエリアが狭くなっているが、そうしなければ物が売れない環境になっている。

以前から針葉樹型枠合板の製造に取組んでいるが、当社製品は月間1万5千から2万枚が安定的に販売できるようにってきた。現状では国内に流通する型枠合板のほとんどが輸入品だが、円安の動向や現地供給量の限界の話もあり、今後は国産材製品に期待したい。

【南川井林業】

当社の構造用集成材の需給バランスに関してはこの1年変わって

いないが、原木規格が難しく出しづらいつの声を頂いている。引き続き相談しながらやっていきたい。住宅着工戸数はあまり変わっていないが、来春以降、復興のスピードアップや、ヨーロッパ産ホワイ

トウッドの供給不足から価格が上がるとの予測から、国産材の需要が上向くと期待している。

ウ、素材生産業者の生産動向

◎岩手県国生連では、国有林の請負生産事業が終わり手山に入る。

1、3月で1万4、5千㎡生産する予定で、うち3割ほどは低質材になる見込である。出荷枠も厳しくなっており、どのように生産していくか悩ましいところである。

◎青森県国生協では12月初めに国有林請負が終わった。民有林の素材生産のみの組合員も多いが、枠が足りないので、広葉樹を含めた生産になる。

◎青森県森林整備協では、1、2月まで請負生産のところが多く、それ以降持ち山に入る。原木受け入れの制限があり、難しい状況で

ある。その他に供給側から次のような報告があった。

◎手山生産は民有林のカラマツが主体だが、ラミナ、パレット、梱包材の動きが非常に悪く、合板工場に頼っている。製紙用チップに関しては、紙の在庫がだぶつきに厳しい状況。岩手県の久慈、岩泉では広葉樹生産が厳しくなっており、冬場の原木不足が危惧されている。

◎冬場の岩手県南は広葉樹はホダ木、針葉樹はアカマツが中心だが、今年はホダ木が放射能汚染の影響で、思うように出せず、アカマツも切り替わりの時期に天候不順となり、いつもより滞っている。

報告事項に関し質疑応答

【質問】最近の合板の製品価格はどうなっているか。

【回答】一時期700円前半まで値下がりしたが、業界全体で歯止めをかけるため値上げを実施し、現在750、760円ほどになっている。

【質問】セイホクの型枠合板の樹種は何か。

【回答】12ミリ、15ミリの塗装合板で、表と裏にカラマツ、中の層にスギ、一部アカマツ、カラマツを使っている。

三、東北森林管理局からの情報

素材生産計画は局全体で67万8千㎡のところ、現在58万5千㎡まで進捗している。素材販売は単価等も大きく変わらない状況だが、現在生産したものの売れていない材が11万㎡ある。立木販売については、昨年もそうだったが落札率が非常に悪く、計画の半分も売れていない。冬場を通して入札を実施していく。システム販売協定量は局全体で32万9千㎡、現在23万5千㎡契約済みで進捗率71%となっている。

四、岩手県からの情報

復興住宅における県産材供給の取組みについて、素材生産者から設計士・工務店までが生産者グループを作り、復興住宅を供給することで、各地域で展開している。

**林業経営技術研修Ⅳ
木質バイオマス発電所等を視察**

12月4日、5日の2日間にわたり、N J素流協主催の「林業経営技術研修Ⅳ」が宮城県及び福島県において開催され、組合員、事務局職員約30名が参加した。視察先は次の通り。

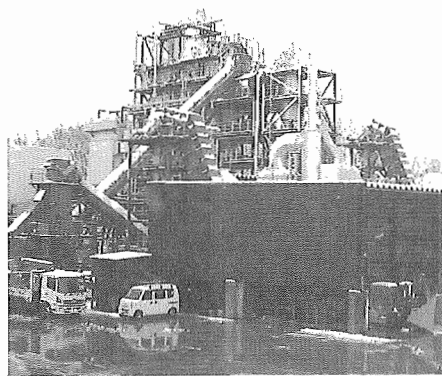
①低コスト再造林実証試験地(宮城県柴田町・宮城県農林種苗農業協同組合(組合長・太田清蔵氏)による実証試験地)

②アカマツ主体原木市場(福島県伊達市・南東北木材(株)が運営)

③木質バイオマス発電施設(福島県会津若松市・(株)グリーン発電会津が運営)

このうち、③の木質バイオマス発電施設は、再生可能エネルギー電気の固定価格買取制度による認定発電所第1号として平成24年7月に運転を開始し、同制度のモデルケースとして全国的に注目を集めている。運営する(株)グリーン発電会津は、(株)ノーリン(材の集荷・納入)とグリーン・サーマル(株)(発電施設の開発・運営)が共同で設立した企業である。発電規模は5000キロ

ワット、燃料となるチップ材の使用量は、湿量基準含水率(生材重量に対する水分重量の割合)40%として1日180トン、トラック15台分であり、年間では約6万トンとなる。材の集荷範囲は半径50km圏内、樹種はスギが主体であり、間伐材等の未利用材が全体の7割を占める。含水率50%程度のチップ材を受け入れ、乾燥ボイラーで10〜15%程度水分量を減じて燃焼させている。参加者は、一定量のチップ材が毎日供給されていることに驚いていた。



木質バイオマス発電施設

**平成24年度 いわて農林水産
躍進大会において受賞**

12月18日に盛岡市の岩手県民会館で開催された「平成24年度いわて農林水

産躍進大会」(主催・いわて農林水産振興協議会、岩手県)において、N J素流協の監事である(株)丸大東北農林代表取締役の大粒来仁孝氏、宏美さんご夫妻が「意欲ある担い手賞」を受賞されました。



受賞された大粒来ご夫妻

これは、いわて農林水産振興協議会会長が優れた農林水産業経営を行っている林業者等を表彰するもので、高性能林業機械を活用した先進的な林業経営や、林業未経験者を採用し各種研修の受講を奨励する等、林業労働者の育成に努めていること等が高く評価されました。

**『小田桐師範が語る
チェーンソー伐木の極意』出版**

この度、N J素流協の組合員である青森県国有林材生産協同組合の小田桐久一郎参事が、チェーンソーでの伐木

作業の極意とチェーンソーマンへの思いを綴った本を出版されました。小田桐参事は、平成22年に伐木世界選手権に出場、また23年にはN J素流協が開催した林業経営技術研修において伐木の講師を務める等、この道のプロフェッショナルとして活躍されています。

12月25日より、全国林業改良普及協会から1995円(税込み)で販売されています。



出版された本の表紙

**流域管理(民・国連携強化)
地域材供給システム構築研修**

林野庁主催の「流域管理(民・国連携強化)・地域材供給システム構築研修」が、東京都八王子市の森林技術総合研修所において12月10日〜12日の3日間にわたり開催され、N J素流協の高橋常務理事が「原木の新たな流通システムの構築に向けた取組」と題し講義を行った。

今月の名木・巨木 9 (金ヶ崎町)

金ヶ崎町指定天然記念物

ヒイラギ

指定：1973年8月30日
所在：胆沢郡金ヶ崎町六原狐森25



ヒイラギは、福島県以南に分布するモクセイ科の小高木で、鋭い棘のように尖った葉が特徴的である。その名は「ひりひり痛む」意の「疼ぐ」に由来し、冬に花が咲くことから漢字では「終」と表され、冬の季語ともなっている。

(金ヶ崎町)

金ヶ崎町のヒイラギは、白鳥の飛来地として知られる赤石堤の南東に位置する民家の裏手にある。樹高7m、根元周囲2・16m、推定樹齢は300年を越すとされ(現地案内板より)、県内でも有数の大木である。

開花期は11〜12月とされるが、取材時は未だ蕾の状態であった。モクセイ科とあって、とても良い香りの花が咲く。

葉の形が特徴的なヒイラギであるが、鋭い棘は若い枝のもので(写真上)、古い枝の葉は丸いのだ(写真下)、と所有者の菊池さんが教え



てくださいました。人も樹も齢を重ねると角が取れる、ということだろうか。

魔除けとして屋敷周りに植えられるほか、節分にはイワシの頭をヒイラギの枝に刺して戸口にかけると、鬼をよせつけない、と言われて

赤い実がなりクリスマスによく飾られるのは、モチノキ科のセイヨウヒイラギやシナヒイラギ(ヒ

イラギモチ)で、葉が互生する(互い違いに付く)ため対生する(対になって付く)ヒイラギと見分けることができる。ヒイラギの実は黒紫色で7月頃に熟す。

なおヒイラギの木は私有地内にあるので、見学する場合は所有者の許可を得るようお願いします。

冗談欄 「ツンデレと逢引き」

言葉は時代の文化と言われ、時の流れとともに新しいものが生まれたり、使われなくなったり死語になったりする。

新しく生まれる言葉の多くは若者たちが作り使う「若者言葉」であり、反対に使われなくなる言葉は年寄りしか使わない言葉「老人語」である。

ツンデレ(普段はツンツンしているが、二人になると優しくなる)、ピン写(一人で自分を撮る)、自宅警備員(ひきこもること)、与謝野(ヘアスタイルが乱れている様子)と与謝野晶子のみだれ髪、タタ(タクシーに乗る)、喪男(モテない男)、捨て左折(右折が渋滞している時に左折を繰返して行くこと)、ほかる(風呂に入る↑ホカホカになる)、午後夢中(午後に眠くなる)、ゼロ意味意味がない↑意味がゼロ)。

若者言葉は、若者たちの中だけで通じる場所に意味があり、全世代に分かる

ようになると、それは若者言葉ではなくなる。

一方、老人語は中高年のみが使っており、青少年は使うことがなく、死語に近い。逢引き、衣文掛け、外套、汽車、月賦、国電、支那そば、電気のホヤ、天然色、天日、バンド、メリケン粉、ルンペン、お宝、活動写真、晩方、とりあげばあ湯殿、長の患い、塩梅が良い。

世はまさに高齢者社会、今後ますます高齢化が進み、老人の国となる日は遠くない。その時、老人語が若者語を駆逐しているかも知れない。

それにつけても、若者語は全く意味が分からず、説明を読んで成る程と思うのである。

それに比べて老人語は意味の分かるものが多い。

ということは小生も老人の域に達しているということか？

平成24年12月分の販売実績

- 1 合板用出荷量を前月と比較すると、スギが約720m³減少、カラマツが約560m³減少、アカマツが約1,430m³増加し、全体では約350m³増加している。昨年同月と比較すると、スギが約370m³増加、カラマツが約3,720m³増加、アカマツが約4,120m³増加し、全体では約8,600m³増加している。今月のシステム販売取扱量は約750m³であった。
- 2 その他(合板用以外)の出荷量は前月より約150m³減少、昨年同月より約3,370m³減少している。
- 3 今年度の年間計画量に対する出荷量の割合(目標達成率)を75%とすると、今年度の全体出荷実績は、計画数量を11.6ポイント下回る結果となった。

(m³)

樹種	長級(m)	当月出荷量			今年度累計			
		合板用	その他製材用等	計	合板用	樹種別割合(%)	その他製材用等	計
スギ	2.0	2,766			20,561			
	4.0	1,786			12,770			
	計	4,552	2,596	7,148	(2,369) 33,331	29.8	36,429	(2,369) 69,760
カラマツ	2.0	4,484			36,853			
	4.0	2,139			19,941			
	計	(749) 6,624	209	(749) 6,832	(2,861) 56,794	50.7	3,261	(2,861) 60,055
アカマツ	2.0	2,895			15,182			
	4.0	1,682			5,034			
	計	4,577	0	4,577	20,216	18.1	98	20,314
その他針葉樹		394	26	419	1,572	1.4	117	1,689
広葉樹		0	74	74	0	0.0	451	451
合計		(749) 16,147	2,904	(749) 19,051	(5,230) 111,913	100.0	40,355	(5,230) 152,268
目標達成率(%)								63.4
計画量								240,000

() はシステム販売取扱量(内数)

落穂拾い

1年経つのが早い。平成24年もはや師走を迎えた。わが身の過ぎ去った1年間を振り返ってみると、何をやったのかという思いで一杯だ。まったく慙愧に堪えない。必死になって思い起こしてみるのだが、これはという纏まった思いがさっぱり形となって浮かばないのだが、最近、その時々頭に浮かんでくるのは自分なりの結論には至らず泡沫のように消え去っていく事柄がある。

新聞等のマスコミや経済評論家によってわが国の社会的・経済的現状・実態を「失われた20年」と言われ出してから久しいが、これは1990年代からこれまでの20年間、世界経済の成長軸がアジア等新興国に移動してきたことから相対的に日本の経済成長力が鈍化し、本来輸出産業国であるのに他の先進国・新興国等に対する競争優位が失われるとともに、加えて信用不安、円高、デフレ、財政赤字、急速に進む高齢化等の要因によって、わが国がこれまでの20年間にわたって経済成長率の低迷を続けてきたことを指す言葉のようである。わが国の製造業が新興国の労働力の低賃金や技術吸収力の向上、市場の拡大等の理由によって国内の工場を閉鎖して新興国に移転させる流れが顕著になっていく。

この流れを指して、「ものづくり衰退論」が叫ばれ、あげくには「全製造業空洞化論」がはびこる始末である。言葉を換えれば、「わが国の製造業は末期の症状だ」と言っているのに等しい。本当にそうなのか?中長期的に考えて、工場移転先が今後とも低賃金のままなのか。労働力

の質の問題はどうか。生産性を比較したときの優位性はどうか。技術開発に対する潜在能力はどうか、また技術開発拠点の喪失による将来に向かっている影響はどうか。現実・実態として新興国の賃金は年々勢いをつけて上昇していると聞く。かつて中国内陸部の賃金は日本の20分の1ともいわれたが現在は賃金格差が数分の1になり、今も値上げ闘争が激しいようである。この傾向は、工場移転先の他の新興国でも賃金高騰が始まっていることにみられる。

また一説には、わが国の製造業の現場は、物的生産性、生産期間、良品率、可動率、などの指標をみると、今でも欧米や新興国に対し競争優位を保っているというのである。先に述べた信用不安や円高等の要因は、製造現場の実態とは関係なく世界経済の中・短期的な変動に基づくものである。過去の逆境に鍛えられた製造現場の生き残る確率は、過去の20年より次の20年間の方が確実に高いという識者もいる。

とは言うものの、あらゆる事象の多様化が進み、混沌の中にある世界情勢をみると落穂拾い子のカオス状態にある頭脳では、何とも判断のしようもなく混濁の中を行きつ戻りつするばかりである。これまで述べてきたことをわが国の森林・林業を対象に置き換えてみたらどうなるのであろうか。これまた頭が痛くなることである。

落穂拾い子にとっての平成24年は、混沌の1年間であった。来る新しい年は内なるカオス状態から抜け出して自分なりのクリアな思考能力を持って過ごしたいと切に願うのである。